Lots Of Vivid Emotionのライブ（上市・三奇楼のテラスにて）

音楽で空き家に“火”を灯す

吉野♪音♪街道

120人のアーティストが奏でる

11月20日、ジャズなどの音楽フェスティバル「第1回吉野♪音♪街道」が上市・立野の旧伊勢街道沿いで行われました。一昨年大阪から平尾に移住したジャズピアニスト柴田コウメイさんの企画に、上市笑転会などの町民有志が賛同。「空き家でコンサートを行うことで、再びこの街道沿いに音があふれるように」というコンセプトどおりに、この日、上市一帯は一日中音楽が鳴り響きました。（メイン会場の丸ビルでのコンサートをCVYで放送します。25頁のテレビガイドを参照ください。）

1柴田コウメイさん（左）と地元アーティストの近藤大貴さん（右）による“オトマンダラ”のコンサート（上市・結ほんまち屋敷）。2会場外の沿道にもお客さんであふれた。（結ほんまち屋敷）3この日は様々な「食」が楽しめる「フードストリート」も開催。三奇楼の蔵で出店したチュロスのお店「チュロカアーラ」での一コマ。4街中に貼られたイベントのポスター。5バップジャズを演奏する“SMH2Nクインテット”（上市・北村錬成館）

1

2

3

4

5

環境に配慮した観光スタイル構築

電気自動車の周遊バス（EVバス）実証実験を実施しました。

吉野山の観光課題解決に向けて

吉野山地区は国立公園内にあり、世界遺産のある地域としても広く認知されています。また、日本でも有数の桜の名所として知られる観光地です。しかしながら、以前より観桜期や紅葉期における交通渋滞や観光客の満足度の低下、観光客と地域住民の安全性の低下が指摘されていました。吉野山地区ではこのような課題を解決するため、観光周遊システム検討会議をおこなっており、今回はそのなかで課題としてあがっている、「まちなかの安心・安全な移動手段の確保」を目的として、環境にも優しくクリーンな移動手段であるEVバスの実証実験を行いました。

環境省と吉野町が共同で事業を実施しました

環境省 × 吉野町

環境省では、日本社会全体の2050年カーボンニュートラル実現を目指し、国立公園においても、世界水準の「ナショナルパーク」としてのブランド化を図ることを目標に、国立公園の適正利用を促進しながら、「ゼロカーボンパーク」など脱炭素の取り組みを進めているところです。

今回、環境省近畿地方環境事務所と吉野町が共同で、吉野山における地域観光課題の解決や地域の脱炭素化の促進に向けた検討のために、EVバスの試験走行とそれに伴う各種マイカー規制等の実証実験を行いました。

新たな観光スタイルを目指して

今回、EVバスを利用した方にアンケートの協力をお願いしました。当日は「音が静か」「乗り心地がいい」など好意的な意見が多く見受けられるなか、利用意向や停留所の数、運賃の目安なども調査しました。この実験で得られたデータをもとに事業効果や二酸化炭素削減効果などの分析・検証を行い、今後の課題解決に向けての検討材料とします。

吉野山地域での渋滞緩和や脱炭素、周遊観光による地域活性化に向けた検討を進め、アフターコロナ時代のグリーンリカバリーも見据えた環境配慮型の観光地として、吉野山のブランド力の強化・発信をめざします。

Report

実証実験（EVバス運行）期間　令和3年11月20日（土）～23日（火・祝）、27日（土）～28日（日）　計6日間

開催場所　吉野山

実施体制　事業主体…環境省・吉野町　事業協力…吉野山観光協会・吉野山自治会・（公財）吉野山保勝会

※今回試験導入したEVバス規格やルートが、そのまま現地で導入される訳ではありません。

LOCAL REVITALIZATION

地域活性化をめざして

道の夢人駅「笑屋」OPEN

吉野材のぬくもりが感じられる空間に

立野にある商店の旧店舗が改装され、上市笑転会が運営するコミュニティスペースとして生まれ変わり、11月13日に記念式典が行われました。

この施設は、上市笑転会が地域の「遊び場」として気軽に集える場所を作ろうと、県奈良の木ブランド課と早稲田大学で建築を専攻する学生らの協力を得て、リニューアルされました。内装には、吉野杉やヒノキの木材を利用し、ベンチや棚を壁面に配置しています。また照明は、吉野町出身のあかり作家、坂本尚世さんの作品です。店内には、最新のチルド自動販売機が設置され、柿の葉寿司や町内の事業者が製造した特産品なども販売されています。普段は無人の休憩所ですが、今後、ギャラリーやライブハウスなどの貸しスペースとしての利用も視野に入れているとのことです。使い方は自由自在で、地域の皆さんのアイデア次第で様々な「夢」や「笑い」の広がるスペースとなり得ることでしょう。

---

charms of the area

地域の魅力発信

町内産酒米で「吉野正宗」

3酒蔵の統一ブランドとして一新

◀右から酒米生産者の山口絆会営農組合霸井さん、美吉野醸造の杜氏・橋本さん、北村酒造の蔵元・北村さん、北岡本店杜氏・夏目さん、中井町長

吉野町では、遊休農地の増加を食い止めようと、2014年から町内の農家および3つの酒蔵と協力し、酒米「吟のさと」を使用した日本酒を作る「遊休農地活性化プロジェクト」を進めてきました。昨年は約9800㎡に作付け。約3.6トンの「吟のさと」を収穫し、北村酒造（猩々）、北岡本店（八咫烏）、美吉野醸造（花巴）の3社統一ラベルとし、ブランドを一新し、「吉野正宗」と命名しました。昨年9～10月にクラウドファンディング（※）で、3本の飲み比べができるセットとして先行販売したところ、好評を得て、応援購入額は約194万円となりました。現在は、ふるさと納税の返礼品として町の魅力を発信しています。来年度以降は、返礼品以外にも観光などへの活用を検討していく予定です。また作付面積を拡大し、遊休農地の解消につなげていくため、農林振興課【TEL（39）9064】では酒米「吟のさと」の生産者を募集しています。

※クラウドファンディング･･･資金を調達したい人や企業が、インターネットを介してプロジェクトの概要や目標金額等を公開し、それに利益や社会的意義を感じた支援者が寄付をするもの。商品によるリターンや節税などのメリットがある。